



発行者兼編集者
鵜戸神宮
社務所
印刷所
西日本印刷



この写真は昭和二十二年当時東郷村松永部落の
区長さんだつた藤下春吉さんの懐かしい御供上げ
の鈴懸馬であります (旧社務所前広場)

ごあいさつ

東弁分部落の皆様へ

鵜戸神宮宮司長友安美

寒さも和らぎ日毎に春めいて参りました。

皆様方にはお障りも無くお過ごしのこととお慶び申し上げます。鵜戸神宮の事に關しましては、種々ご配慮をいただき有難く厚く御礼申し上げます。

さて、先般来当神宮の門守神社社殿の払い下げ問題と、大宮神社御社殿修復寄附の問題につきまして、話が混同いたし、皆様に大変ご心配とご迷惑をおかけした事と存じます。

右の事につき要約して申し上げますと、鵜戸神宮の楼門建設に伴い、以前より参道の両側に鎮座して居りました門守神社の社殿一棟を、昭和五十年七月十九日付を以って、神社庁南那珂支部宛払い下げ(一棟は地元吹毛井部落へ)その後支部の方々の抽選により、池田支部長に決定、大宮神社に移され鎮りましたとの事にて安堵して居りましたが、役員会の決議事項であります処の社殿払い下げの条件としての応分の奉納金、並びに社殿受領書が仲々神宮に到達せず、門守社の払い下げについて役員会での報告も出来ず困惑して居りましたので、二月二十二日付にて如上の事を認め、善処方を池田支部長宛お願い致しました。然る処三月七日大宮神社の池田宮司さん(支部長)と野田重雄、野中末次両氏子総代さんのご来宮を受けましたので、神宮の事情を良くお話し、又大宮神社の事情もお聞かせ頂き、双方とも他意の無かつた事の真意の了

解ができ、又その折、社殿受領書と御初穂料も持参されましたので、ここに門守神社社殿は正式に大宮神社が頂かれ、この問題は無事解決をみた次第であります。

尚、大宮神社御社殿修復の寄附の件につきましては、神宮としましては右の件が解決してからと考えて居りましたし、又当方残念乍ら火災で御造営の資料が焼け、その当時の様子がわかりませんので、両部落からのご寄進の様子を調べていただいて、おそまき乍ら、それ相応の初穂料を上げさせて頂きたいと両総代さんへ申し入れを致しました。ところ、ご了承頂きましたので後日然るべく取計う所存であります。

以上の次第でありますので両部落の皆様方におかれましては、大宮神社御社殿修復寄附金につきましては、神宮としては他意の無かつた事をご諒恕下さいまして、伝統のある御供米の行事と、四半的のご参加の事は来年よりは、又従前の通りお願い申し上げます。

実は直接皆様方にお目にかかり、右の経緯を開陳し、お願い申し上げますところではあります。ここに取り敢えず、社報「鵜戸」の臨時号を以ってご挨拶申し上げます。のあらましをご賢察いただく次第であります。

御供上げについて

権官司 佐藤美春

寒い寒い冬が去って暖かい春の日ざしに、若草がもえ出で、畑に菜の花、田園にレンゲの毛せんが敷かれ、山にかすみ桜と共にたなびき匂う季節がやってきました。あちこちの鎮守の森からは、今年太鼓の音が響き渡り、皆様の心はいやが上にもはずんで、苗代作りにお忙しい今日この頃でございましょう。

御存じの様に日本は豊葦原の瑞穂の国と申して居ります。春のはじめに全国のお社で、祈年祭(春祭)をいたし、五穀の豊穰を祈念して居ります。この祈年の年と申しますのは、穀物の事で特に稲の事を申します。こゝにそのお祭の祝詞の一節をうかがってみますと

「農業に励む諸人等が、手

腕に水泡掻きたり向股に泥搔きよせて取作らむ、奥つ御年をはじめて草の片葉に至るまでに作りと作る物等を、悪しき風、荒き水に遭わせ給わず、豊にむくさかに成し幸い給い」

と、ひたすらに祈念し、そして汗水を流し、丹精して出来た八束穂の稔の初穂を神に捧げ、感謝の生活をおくっているのではありません。

さて皆様の東郷地区と鵜戸さんの御供上げの御縁は、ずい分、古い昔からと思われまします。と申しますのは、東郷には現在でも神田という地名が残っているからです。

その昔、鵜戸さんの二神山に神供田があって、まずそこで春のはじめに農事始めの神事があり、その神事の稲種を戴いて帰り、まず神田にまき、

そして各自の持田にまかれた様であります。

古老の話によると、その様な御縁があったから、その信仰が引継がれていて、戦時中も戦後も変わる事なく、春祈念には必ず部落の代表が鵜戸さんにお参りしたそうです。そして日を改めて、部落で神樂をしてその年の豊作を祈念し、田作りをいたし、戦後の食糧事情のむずかしい時代にも、秋の出来穂を氏神様は勿論の事、一部は吠(或は俵)に入れ、鈴懸馬に乗せ、部落の代表が引いて山坂を越え、新嘗祭(秋祭)の日に鵜戸さんに参り奉納したそうです。

これが一年間の部落の行事の中でも主な行事となっていて、御供上げの代表が部落を発つ時は、最初に途中の安全を祈って出立の儀が行われ、

そして酒盛りをして出発し、鵜戸さんでは御供上げの神事後、お直会の儀にあづかったのであります。無事、部落に帰ると、大皮を果した慰勞

の坂迎い(酒迎い)がなされていたと言われて居ります。

そもそもこの御供上げの感謝の行事の遠い由縁を尋ねてみますと、天照大神が保食の神の体に成りました稲をはじめ粟、稗、麦、大豆、小豆等をごらんになって大変お喜びになり、「これぞうつつしき蒼生の食べて活くべきものである。」と申されて、粟、稗、麦、豆を陸田の種子とされ、稲を水田の種子とされた。そして天孫降臨の時にこの高天原の斎場の稲穂を皇孫にお授けになったと、日本書紀という本に記されています。

農をもって本となす大和民族の祈りと感謝のこの美麗しい御供上げの行事は、永く子孫へ伝えて行きたいものがあります。

